

以上、分担保存について簡単に述べさせていただきます。他にもいろいろ異論があるとは思いますが、ここは一つ真剣に考えて意見を出し合ひまして、ほんのちょっとした糸口でも見つけられたら、とにかくやってみる、やりながら検討を加えて、よりよい方向に持って行くという姿勢が大事なのではないかと思ひます。

お聞き苦しい点があったと思ひますが、御静聴、ありがとうございました。

曾 我： 有難うございました。

それでは次に、今お話があった大学医学図書館の関係から、山口さんの『地域における大学医学図書館と病院図書室の連携』について、お話を伺いたいと思ひます。

よろしくお願ひいたします。

2. 地域における大学医学図書館と病院図書室の連携

山 口 直 比 古^{*}

浜松医科大学図書館の山口でございます。

『地域における大学医学図書館と病院図書室の連携』という私に与えられましたテーマは、誠に荷が重いテーマでありまして、大学医学図書館に所属している点から、何かよい話、つまり大学図書館に何が出来るかと言ったような話が聞けるのではないか、とお考えになっていらっしゃる方が居られたら、おそらく期待はずれになるだろうと言うことを、まずお断りしたいと思ひます。

それから、また、これからお話をさせていただきますのは、私の個人的な体験から得られました事柄でありまして、あくまで個人的立場で申し上げるのだと言うことを、ご承知おき頂

きたいと思ひます。

地域ネットワーク

抄録の方にも書いたのですが、大都市型のネットワークと、そうでない特定の大学図書館と結びついた地域のネットワークの二種類があるといった具合に、一応想定しておきます。

そこで私の話は、一応、後者……『地域における』という限定が付いておりますので、そちらの方についてお話をさせていただきます。本日の参加者の方は、大都市圏からの方が多く、そういった点では、余り参考にならないかと思ひますが、まず、福島県・北

* 浜松医科大学附属図書館運用係長

海道・静岡県における事例をご紹介させていただきます。このうち北海道・静岡県につきましては私が直接経験した事柄であります。と申しますのも、私、今年の1月まで北海道、旭川医科大学の方に勤務いたしております、この2月に、浜松医科大学に転任し現在に至っていると言うようなことから、私が現場におりましたときに体験したことであります。そのあと、私なりの考え方を述べさせていただきますと思います。

抄録にも書きました通り、一県一医科大学という地域におきましては、大学図書館を含む相互協力ネットワークを作るという必要があると考えられます。そこへアプローチする方法といたしましては、大学図書館の側が、病院に積極的に働きかけるやり方と、病院図書室のグループが大学図書館の側に積極的に働きかける、というやり方があるかと思えます。福島県・静岡県の場合は前者の例でして、即ち、大学図書館主導型のネットワークの例として、北海道の場合は病院図書室主導型の例としてご紹介させていただきます。

福島県の例

福島県の場合ですけれども、名称が「大学図書館と基幹病院図書室ネットワーク懇談会」という名称になっておりまして、これまでに2回開催されております。

第1回目が昨年（1985年）の5月、第2回目が今年（1986年）の4月であります。参加館は、福島県立医科大学・東北歯科大学の2医科大学と病院が8病院、それに製薬会社の研究機関が1カ所入っております。ここに至る過程ですけれども、まず前段階的なものいたしまして、1980年に福島県立医大の図書館員が医学図書館員セミナーに参加いたしまし

た際に、県下の病院図書室の実態調査をしてレポートしております。それから数年たった後なんですけれども、昨日の話にも大阪市立大学の光斎さんから、医学図書館協会が積極的に病院図書室とネットワークを組むという話がありましたが、数年前、医学図書館協会への病院図書室の加盟問題が生じた際に、福島県でのネットワーク作りの必要性を感じまして、福島県立医大の方から呼びかけて、第1回の懇談会を開いたというのが経過でございます。ここに至ります過程では、福島県立医大の主任司書という方が、医学図書館の経験の非常に長い方で、医学図書館協会の中でも色々ご活躍なさっている方でしたので、この方の発案といえますか、呼びかけの形をとっていたようであります。

これまでの活動といたしましては、「現行雑誌目録1986」というのが、まず今年、つい最近ですけれども作られました。これは1986年の契約リストでして、医学図書館協会で作っています。「現行医学雑誌所在目録」と同じような種類のものです。それから同時に、「相互貸借マニュアル」というのも作られました。そこには参加館、規定とかいろいろ書いてあります。

今後の予定といたしましては、今の現行目録から所蔵目録へ移行する、総合目録を作成するというのと、図書の総合目録を作成したいということで、現在、各参加館の目録作成状況をアンケート調査いたしまして、集計中であるということでもあります。

もう一つ、今後の課題といたしましては、複写料金を統一して行きたい……どう処理するかということも含めて……そういうことが検討課題であります。

このネットワークの場合、大学図書館が呼びかけて、積極的にネットワーク作りを進め、

具体的に問題を解決する方向で活動が行われている。といった例でありまして、大学と病院図書室との、ある意味では現実的な関係を現在作りつつあると言えるかと思えます。

ただ議事録などを拝見いたしましても、かなり、まだ医学図書館の側が病院図書室に対して、何かご質問ありませんか、何かご希望ありませんか、といった形で呼びかけて行くというような段階でありまして、病院図書室の側から、こういうふうにしてほしいというような形には、まだちょっと動いていないような気がします。

今後の課題といたしましては、年1回懇談会を開くだけでなく、もっと頻繁に、あるいは研修会なども含む、それからニュース・レターのような会報を発行する、そういった形できめ細かなネットワークを作っていくということが必要ではないかと感じております。

北海道の例

次に北海道の場合ですけれども、「北海道病院図書室懇談会」、これは仮称でありますけれど、これが今年（1986）6月に、札幌で8病院が集まって第1回が開催されました。

ここに至ります過程ですけれども、まず旭川医科大学の関連病院でありました3病院、旭川市内の3病院の担当者及びもう一人別の病院の担当者の方々が、相互に協力することを話し合ったのが最初でありまして、旭川医科大学はこの間、こうしたことについては積極的に参加しておりませんでした。

1984年以来、3病院による総目録というもの、これは3年目になるんですけれども、こういうものが作成されておりました、自主的な文献複写業務を行っておりました。それから昨年（1985）の9月以降、道内の病院のネットワーク作りを目指しまして、2次にわ

たるアンケート調査を実施いたしました。これは、病院図書室研究会の御協力を得て行ったわけですが、その結果は“ほすびたるらいぶらりあん”11巻1号、今年発行されたものですが、これに報告されております。この調査の中から、全道に散らばる多くの図書室担当者と連絡を取り合い、ネットワーク作りが模索されたわけです。

今年6月、札幌で第3回図書館情報サービス研究大会が行われました際に、第1回の北海道病院図書室懇談会といったものが開かれたわけでありまして、現在、ニュース・レターを発行しております、これは9月創刊ですけれども、まだ1号しか発行されていないのですけれども、こういったものを月に1度ぐらいだしていこうかと、非常に肩の凝らない内容なわけですけれども、私はこういうのが大切んじゃないかという具合に感じました。

今後の予定といたしましては、第2回の懇談会が11月20日に行われます。病院図書室の担当者が集まり大学図書館を含まない形で進行しているわけでありまして、大学図書館の側からは、個人的な資格で参加や協力はありませんけれども、組織的な面や、制度的な面では、今のところ関係はありません。今後、やはり大学図書館とある程度コネクションを持った形で会を維持して行くというのが課題ではなからうかと思えます。

つまり、北海道には北大医学部、札幌医科大学、旭川医科大学という3つの医科大学がありますが、そこらへんをいかに巻き込んで行くかが課題ではないかと思えます。

静岡県の例

次に静岡県の場合ですけれども、これは現

在、「静岡県医療機関図書室連絡会」というものがございます。これが出来た過程ですけれども、最初に浜松市内のいくつかの病院と浜松医科大学との間での話合いが持たれましたのは、もうすでに10年以上前のこととなります。

これは浜松医大に、当時、医学図書館の活動にかなり熱心に取り組んでおられた主任司書が居られたということと、元来、地域へのサービスというのが大学設立の大きな柱であったといったことなどから、大学の側から病院図書室へ呼びかけて集まってもらったということであったようです。

当初は会としての形は整えられていなかったものでありますけれども、昭和55年11月に、「県西部医療機関図書室懇談会」として改めてスタートをきりました。この会は昭和60年3月までに合計5回開催されております。ほぼ年に1度という事ですが、全く開かれない年もありました。この間、浜松医科大学の主任司書は4人変わっております。

昭和60年8月に、浜松だけでなく県東部の静岡市や焼津市、清水市などの病院図書室などへも呼びかけまして、「静岡県医療機関図書室連絡会」という現在の名称に変わりました。第1回の集まりが持たれました。そして昨年12月に第2回が開催されました。

会といいましても、従来から規約もなく、取り決めもなく、会員制といったものでもなく、そういう意味では大変ルーズな集まりでありまして、会の召集も浜松医大が一方的に行うという形がとられております。ここでは主として、浜松医大をどの様に利用できるか、どの程度利用できるかといった点などにつきまして、病院の方、ら希望が出され、大学が答えるといった形で進められており、

閲覧や文献複写においては、一定の成果を挙げております。また外国雑誌やオンライン検索といったテーマで研修が行われたこともあります。

現在、静岡県下の病院の実態を調査するためのアンケート調査が行われており、簡単な一次調査を終了し集計中であります。引き続き、よりこまかな内容の第2次調査が行われるものと思います。

また昭和59年に、浜松市内8病院の“図書室雑誌総合目録”が作成されまして、当時浜松医大で所蔵していない雑誌を126誌含んでいたということでありました。この経過が、東京で行われました「第1回図書館情報サービス研究大会」で発表されたのでありますけれども、私はこれを聞きまして、大変驚かされました。浜松医大自体が、とても医学図書館と名乗るには恥しいほどの雑誌しか持っていないものですから、これは当然のことと思います。

現在、県下14病院及び看護学校を持つ2短大、それに浜松医大の加わった雑誌総合目録が作成されつつあります。既に和文編は完成し、欧文編については現在入力が進められております。

こうしてお話をいたしますと、全てが順調にうまくいっているかのように見えるのですけれども、この連絡会は、大学主導型といった形からくる大きな欠点を持っております。

それは、大学の主任司書の考え方一つで問題が左右されてしまうという点であります。現在、この連絡会は、このことから生じている大きな問題を抱えています。今後は、大学側の担当者に左右されない組織作りをして行くことが課題であると考えられます。

ネットワーク作りのすすめ方

特定の地域の大学図書館を含むネットワークを形成しなくても、地方の病院図書室においても大都市型と言いますか、文献複写という点では、どんどんと東京近辺の私立大学等に、申し込んで文献を入手することが出来る訳です。

しかし、ネットワーク作りの目的と言いますのは必ずしも、文献複写サービスだけではございませんので、地域の中において、資料の面でも人的な面でも援助を受けるために、大学図書館が病院図書室に対して様々な面でサポートするというのは、当然のことであると私は思います。しかし、はっきり申し上げまして、福島県における様に、大学の側から病院に呼びかけてネットワークを作るということは、人の面でも、或は理念の面でも多くの大学医学図書館に期待することはできないというのが現状であります。

先日もある有名国立大学から、人員が不足していて、講座所蔵の雑誌の文献複写の希望には応じられません、という手紙が届きました。こういった状態においては、まず皆さんが自分で作るといったやり方の方が有効的でずっと現実的なやり方であると、私は考えております。

最初のきっかけは必要でしょうけれども、まず数人で始める、北海道では旭川市の3人で始めたわけですけれども、その3人が一堂に会するまでも数年を要しました。つまり、電話でのやり取りによる文献複写等はおこなわれていたわけでありませうけれども、もっと積極的にネットワークを作って行かなければならない、というように考えるに至るまでに、それ位時間がかかったということでもあります。

次に、県とか地域の中での実態調査をすることをお勧めいたします。これは、他の病院

図書室担当者との連絡が取れる、実態を把握することによって、相互に連絡が取れるようになるということでもあります。

当初は余り組織的なことを深く考えなくても、とにかく集まる、先ほどからありましたけれども、とにかくやってみるということが大切なのであります。大学側からはオブザーバーとして、サービス部門の担当者に参加してもらえばよろしいのではないかと思います。

更にネットワークの活動が軌道に乗れば、雑誌の総合目録を作るといったようなことが、大変よろしいのではないかと思います。これには3つの効果が最低あるのではないかと私は思います。まず資料としての有効性、これは当然のことだと思います。

次いで、目録を作ることによる、つまり総合目録を作るためには、まず自分のところの目録がなければならぬわけで、この一連の作業がもたらす教育的効果が大きいと思います。

そうして最後に総合目録は、ネットワークの具体的表現であるというシンボリック効果、これも見逃せない効果であると思います。

これまで申し上げましたのは、大学主導型のネットワークではなく、病院主導型のネットワークを形成する方が、現在有効であるということでもあります。

皆さんが集まりを持つには、確かに大学などの呼びかけがあった方が集まりやすい状況があるかと思います。しかし、現在、46都道府県の内、1県に一つの医科大学しかないという県が34県あるわけですけれども、この内30県は国立大学であるわけです。国立大学は人の異動が激しく、特に人的援助といった面

では、ちょっと当てには出来ないわけですね。そうした場合にはまず、主任司書も含めて担当者レベルで個人的にネットワークへの参加をよびかける。あるいは病院図書室の業務そのものをサポートしてくれないか、と呼びかけるようなやり方がよいのではないか、と思います。

個人のレベルである程度の事しかできない、と言うのではなくて、そういうところを、とっかかりになさるとよろしいのではないか、と思います。協力してくれる人間を見つけることですね。ネットワークの基本はヒューマンネットワークにある、ということだろうと、私は思います。

私の話は、大学図書館に所属している側からの一方的な考えでありまして、病院図書室の事情を全く理解していない、といったようなおしかりを受けるのは当然かと思いますが、一応大学図書館主導型のネットワークの成功しつつある例として福島県の例を、また、失敗しつつある例として静岡県例を、病院主導型のネットワークの試みとして行われている北海道の例を申し上げまして、私の考えを述べさせていただきました。

有難うございました。

曾 我: どうも有難うございました。

それでは次に、利用者の立場から、医療関係の中で最も人数の多い看護部門から「病院図書室への期待—利用者の立場から—」と題しまして、淀川キリスト教病院教育婦長の青山さんをお願いいたします。